

景観植物資源部門



谷津田景観構造変化に関する研究

Changes in landscape structure of "Yatsu" valleys: a typical Japanese urban fringe landscape

要 約

関東南部に特有な谷津田景観を面積および各景観要素の隣接関係の変化の観点から検討を行った。面積変化では、都市域においては人為的改変による変化が卓越していたのに対し、農村域では管理放棄による変化が卓越していた。また、景観要素間の境界長の変化にも特徴があり、都市域の谷津田では生物の移動が阻害され生息環境の劣化が進行していると考えられた。

研 究 者

藤原 道郎
FUJIHARA Michiro

■はじめに

景観は主に物理的環境、生物的環境から構成されるが、その成立要因として地質、地形、気候といった物理的環境ではなく、現在では人為的インパクトによる影響が卓越する地域が多い。しかし、景観構造の変化の方向や要因は地域や時代により異なっており、それらの法則性は未だ解明されてはいない。事例を通じてこれらを解明することは景観生態学の発展に留まらず、地域特性に基づいた環境保全や地域計画の重要な指針となる。本研究では、植生を基盤とした景観構造を明らかにすることを第一の目的とする。次にその変化および要因の検討を第二の目的とする。

■調査地および方法

都市近郊域の中でも都市化の進行度が異なる2地域（市街地に近い都市域、辺縁部に位置し都市化が進行中の農村域）を対象とし、空中写真、現地調査等に基づいて作成した景観図から景観要素の数、面積、要素間の境界長の算出を行った。境界を生物の移動のしやすさに着目しタイプ分けを行い、その割合から景観構造の地点間ならびに時代間の比較を行った。

■結果および考察

都市域においては人為的改変が卓越するのに対し、農村域においては人為的攪乱の減少に伴う変化が卓越していることが明らかになった。都市域と農村域において、景観要素間の境界長に着目し

たところ、都市域においては生物の移動が容易な境界の割合が減少し生物の移動を妨げる境界の割合が増加したのに対し、農村域においては生物の移動が容易な境界の割合が多く、変化していないことが明らかになった（図1）。地域の生物多様性を維持するためには境界の質にも考慮することが必要である。

Fujihara M., Hara K. & Short K. 2005. Changes in landscape structure of "Yatsu" valleys: a typical Japanese urban fringe landscape. *Landscape and Urban Planning*. Vol 70/3-4 pp 261-270.

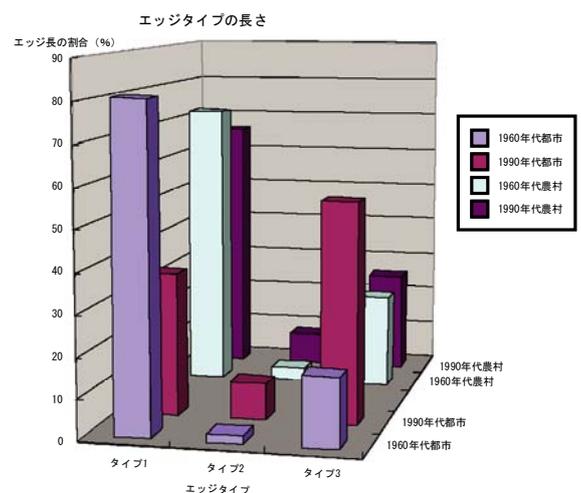


図-1 都市近郊域における都市地域と農村地域における生物の移動を考慮した3つのタイプの境界長の割合の変化。都市化により生物の移動が容易な(タイプ1)境界の割合が減少し、移動が困難な(タイプ3)境界の割合が増加したことを示す。